

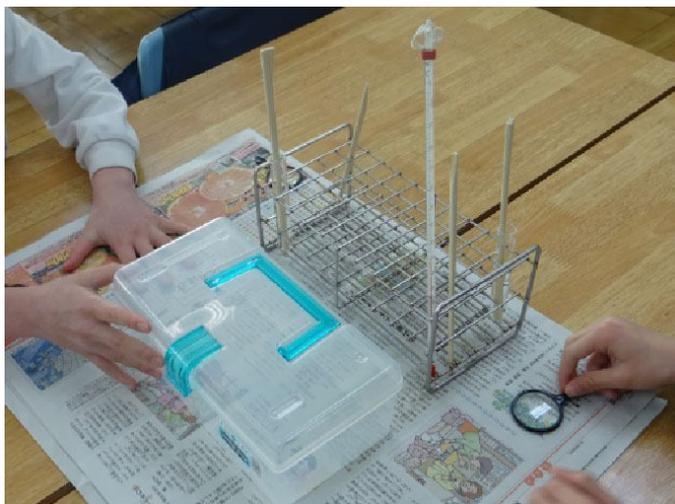
「雪を寒剤にして楽しむ(2)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

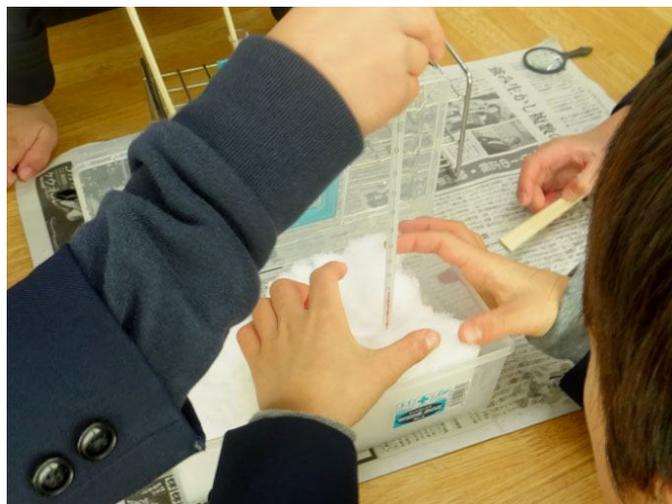
雪の採取には、100円ショップの半透明ケースが非常に役に立った。機密性は良くないが、結構しっかりした蓋がついていて、持ち手もあるので、「安全に」雪を室内まで運べる。



しかしさすがは3年生! 「だれが雪ケースを持つか」ということで、大げんかしている班もあった。要するに「雪を運ぶ」という体験は、東京の子どもたちにとっては、非常に新鮮な体験なのだろう。



採取した雪が融けないうちに、すぐに実験ができるように、実験器具はあらかじめ各研究所(班)に準備させておいた。雪の容器のほかに、試験管立て、試験管各自1本、わりばし各自1本、虫めがね各自1本、それに棒温度計である。こうした実験器具が目の前にあるだけでも、3年生の子どもは目を輝かせて、ワクワクするものである。



採取した雪は、食塩を入れる前に、まず温度(雪温)を測定する。雪の温度の測定も、ほとんどの子どもにとっては初めての体験だ。0℃~-2℃が多かった。



いよいよ食塩を投入する。雪と色も質感もよく似ている。重量比で雪の3分の1が理想だが、それ以下でも寒剤としては、十分に機能する。



それをかき混ぜる。積もって数日たった雪は、ザラメ状になっていて、寒剤の材料としてま、理想的な粒状性になっている。「味見」は厳禁と注意を忘れずに。